

引用文献

- あきらめる. (1995). 梅棹 忠雄, 金田一 春彦, 阪倉 篤義 & 日野原 重明 (監). 日本語大辞典第二版(pp. 15). 講談社.
- 荒川 修二. (2019). 脳卒中の概念と分類. 田川 浩一・橋本 洋一郎・稲富 雄一郎(編) マスター脳卒中学—最前線医療の現場からリハビリテーションまで—(pp. 131). 西村書店.
- 秋元 陽子. (2019). 回復期リハビリテーション病棟から自宅退院した患者の生活状況と退院後のニーズ. 茨城県立医療大学付属病院研究誌. 22, 39-48.
- 青木 拓也, 廣江 圭史, 鈴木 暁, 平賀 篤, 上出 直人. (2016). 回復期脳卒中患者が自宅退院時に抱く不安や考え. 理学療法学 Supplement, 2015, 0934.
<https://doi.org/10.14900/cjpt.2015.0934>
- 浅田 美紀, 成瀬 優知. (2002). 脳卒中発症前後の生活変化と心理状態との関連. 日本地域看護学会誌, 4(1), 95-99. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2002278510>
- 文脈. (2014). 木田 元, 村田 純一, 野家 啓一, 鷺田 清一(編). 現象学辞典(pp. 35). 弘文堂.
- Ekman, P., Levenson, R. W., & Friesen, W. V. (1983). Autonomic nervous system activity distinguishes among emotions. *Science (New York, N.Y.)*, 221(4616), 1208-1210.
<https://doi.org/10.1126/science.6612338>
- 千葉 京子, 中村 美鈴, 長江 弘子. (2003). 大腿部頸部骨折術後高齢者が「生活の折り合い」に向かう心理的過程-退院1週間前から退院1ヶ月後までの経過-. 日本看護研究学会雑誌. 26(5), 73-86.
- 千葉 真弓, 安田 貴恵子, 御子柴 裕子. (2009). 脳卒中患者の在宅移行期における看護ニーズの検討-4事例の検討から-. 長野県看護大学紀要, 11, 39-49.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2009296189>
- 福良 薫. (2009). 身体機能障害を抱える脳卒中患者の生活の再構築の体験. 日本看護研究学会雑誌, 32(3), 222. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2009329874>
- 福良 薫. (2010). 脳卒中患者における身体機能変化に伴う「病い」の体験の意味. 日本脳神経看護研究学会誌, 32(2), 135-143. <https://jglobal.jst.go.jp/detail>
- 福良 薫. (2015). 身体機能障害を抱える脳卒中患者の生活の再構築に向けた看護介入の

- 検討. 日本看護研究学会雑誌, 38(1), 1_113-1_125.
<https://doi.org/10.15065/jjsnr.20141107006>
- 日下部 瞳, 小田 美代子. (2004). 脳血管障害患者の対処能力に関する研究 独居生活
 想定される患者へ焦点を当てて. 日本リハビリテーション看護学会学術大会集録, 16
 回, 182-184. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2005180453>
- 源河 亨. (2021). 感情の哲学入門講義. 慶應義塾大学出版会.
- 百田 武司, 宮腰 由紀子, 片岡 健. (2009). 脳卒中患者の回復期における体験-回復期リ
 ハビリテーション病棟入院期間中の縦断的研究. 日本脳神経看護研究学会会誌,
 31(2), 95-107. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2009252158>
- 百田 武司. (2009). 脳卒中患者の維持期における体験. 日本赤十字広島看護大学紀
 要, 9, 1-10. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2009195717>
- 百田 武司. (2010). 通所リハビリテーションの果たしている役割-脳卒中維持期患者への
 面接調査より-. 日本脳神経看護研究学会会誌, 33(1), 43.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2011112637>
- 井口 光希, 奥田 愛梨, 加藤 愛理, 竹村 麻里, 谷口 七海, 塩見 理香, 池添 志乃.
 (2020). 脳血管障害をもつ療養者とともに生活する介護者の折り合い. 高知女子大学
 看護学会誌, 46(1), 95-104. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2021157365>
- 石原 未幸, 直成 洋子, 石鍋 圭子. (2015). 退院後の脳卒中患者が在宅生活移行で経験
 する困難さ. 日本慢性看護学会誌, 9(1), A60.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2016061616>
- 和泉 京子, 川口 敦子, 上原 ます子. (2004). 地域で生活する若年脳卒中患者の思
 い. 老年社会科学, 26(2), 269. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2006077889>
- 梶谷 みゆき, 太湯 好子. (2004). 脳血管障害後遺症を持つ男性患者と配偶者の心理と関
 係性の分析: 自宅退院後6ヵ月の事例から. 家族看護, 2(1), 134-139.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2004148933>
- 梶谷 みゆき, 森山 美知子. (2010). 脳血管障害発症後3ヵ月における患者と家族の心理
 的ケアニーズ. 家族看護学研究, 16(2), 71-80.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2011112414>
- 神山 幸枝, 金子 昌子, 小平 京子. (1997). 中年期脳血管障害患者の生活への影響と適
 応に関連する要因. 日本看護学会集録, 28回(地域看護), 32-34.

<https://search.jamas.or.jp/link/ui/1998234027>

神山 幸枝, 岡田 えみ子, 内田 郁子, 小平 京子, 金子 昌子, 松下 由美子. (1998). 脳血管障害患者の生活への適応と不適応に関わる因子. 自治医科大学看護短期大学紀要, 6, 9-19. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/1999151821>

感情. (2023). 実用日本語表現辞典.

<https://www.weblio.jp/content/%E6%84%9F%E6%83%85?dictCode=JTNHJ> (検索日: 2024 年 1 月 26 日)

公益法人脳卒中協会. (2019). 脳卒中体験者インタビュー. <https://www.jsa-web.org/citizen/3565.html> (検索日: 2024 年 1 月 26 日)

今城 博子. (2007). 回復期リハビリテーションにおける脳卒中患者の主体性の発揮に関する研究. 日本リハビリテーション看護学会学術大会集録, 19 回, 140-142. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2008057191>

後遺症, (2018). 新村出(編), 広辞苑 第7 版 (p.965). 岩波書店.

厚生労働省. (n.d.). 国民生活基礎調査概要 介護状況. 厚生労働省.

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/05.pdf> (検索日: 2024 年 1 月 26 日)

窪田 佳奈, 藤田 陽子. (2017). 自宅退院した脳卒中患者の抱える不安を明らかにする. 臨床今治, 29(1), 61-64. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2017207080>

黒澤 佳代子, 池田 清子, (2015). 回復期リハビリテーション病棟において脳卒中患者が主体性を回復していく過程-エピソード記述で 1 事例を分析して-. 神戸市看護大学紀要, 17, 45-53.

桑田 雅利. (1980). 寝たきりから立ち上がって: 脳卒中闘病記. 青潮社.

桑原 里奈, 金子 昌子, 梶山 直子. (2012). 脳血管疾患患者が障がいと折り合いをつけていく心理過程. 日本リハビリテーション看護学会学術大会集録, 24 回, 208-210. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2013058719>

川井 加奈子. (2001). 脳卒中患者の心理学的一研究-障害との折り合い、意味づけの視点から-(平成 12 年度発達臨床学専攻修士学位論文概要) [名古屋大学大学院教育発達科学研究科]. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 48. (pp. 388-390). <https://nagoya.repo.nii.ac.jp/records/1694>

河島 光代. (2020). 分岐粥腫型梗塞を発症した進行性脳卒中患者の病の体験の特徴. 聖

- 路加看護学会誌, 23(1-2), 30-36.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2020138963>
- 風間 奈々子, 塩崎 悦子, 辻本 七重, 鳥居 泰子, 村中 千紗, 吉田 恵美, 泉 キヨ子, 平松 知子, 正源寺 美穂. (2008). 回復期リハビリテーション病棟退院後在宅で生活する脳卒中後遺症者が抱く思い. 国際リハビリテーション看護研究会誌. 7(1), 38-44. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2009197577>
- 北尾 良太, 純恵 鈴木, 香土井, 安子清水. (2013). 回復期リハビリテーション脳卒中者が語る病い経験に関する研究. 日本看護研究学会雑誌, 36(1), 1_123-1_133.
<https://doi.org/10.15065/jjsnr.20121228009>
- 木田 元, 村田 純, 野家 啓一, 鷺田 清一. (2014). 現象学辞典(pp. 35). 弘文堂
- 清野 哲平, 石貫 絵梨, 原 千晴, 坂本 治子, 表 留美子. (2005). 障害を持つ患者が障害と折り合いをつけている過程に着目した面談の効果. 日本看護学会論文集: 成人看護 ii, (36), 160-162. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2006139871>
- 棕本 美帆. (2020). 「脳血管疾患による片麻痺患者の回復期における障害受容」の概念分析. 関西看護医療大学紀要, 12(1), 44-53.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2020343784>
- Mary Fran Tracy & Rileen T. O'Grady (編). 中村美鈴, 江川幸二(訳). (2020). 高度実践看護総合アプローチ 第2版. へるす出版. (pp. 58).
- 増井 金典. (2012). しかたない. 日本語源広辞典(pp. 459). ミネルヴァ書房.
- 益 宏美, 藤田 佐和. (2015). 再発を体験した脳血管障害をもつ人の構え. 高知女子大学看護学会誌, 41(1), 107-119. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2016165669>
- Milton, Mayeeroff. (1987). 田村真, 向野宣之(訳). ケアの本質: 生きることの意味. ゆみる出版. (pp. 93).
- 美ノ谷 新子, 佐藤 裕子, 宮近 郁子, 陣川 チヅ子, 大西 美智子, 藤原 泰子, 星野 早苗, 山崎 純一. (2008). 脳卒中退院患者からみた在宅療養生活開始時の現状と課題. 順天堂医学, 54(1), 73-81. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2008196325>
- 前田 清隆, 荒田 征爾, 西脇 雅, 桐山 啓, 志村 勇, 松尾 厚, 早川 大吾, 末松 智, 土田 学, 丸毛 久美子, 加藤 佐知子, 細江 雅彦, 高橋 裕司. (2000). 脳卒中患者の在宅における QOL. 岐阜県立下呂温泉病院・温泉医学研究所年報, (27), 64-69.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2001182448>

- 松岡 由美子, 長島 緑, 山中 京子. (2022). 脳卒中後の急性期から生活期に至る気持ちの変化とリハビリテーションに関する探索的研究. 千葉科学大学紀要, (15), 60-68.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2023079231>
- 森口 靖子. (2002). 在宅脳血管障害後遺症者の主観的満足感と関連要因の検討. 香川県立医療短期大学紀要 3, 55-60. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2002278554>
- 三好 陽子, 伊藤 千晴. (2021). 脳血管障害患者の健康関連 QOL と心理的適応の変化と関連-退院直後と 6 ヶ月後の比較-. 日本看護技術学会学術集会講演抄録集, 19, 66.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2022072459>
- 村上 満子. (2018). 精神障害者における折り合いの構造-11 人のライフヒストリー-. 沖縄県立看護大学紀要, (19), 11-18. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2019299358>
- 中谷 敏. (1989). 脳卒中障害者における受容をめぐって. 中通病院医報, 30(1), 35-48.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/1991034195>
- 中島 八十一. (2006). 第 1 章 高次脳機能障害の現状と診断基準. 中島八十一, 寺島彰 (編集). 高次脳機能障害ハンドブック - 診断・評価から自立支援まで-. 医学書院. (pp. 1).
- 日本看護大学協議会. (n. d.). 高度実践看護師. 日本看護協会.
<https://www.janpu.or.jp/activities/committee/cnsnp/#link01-01>
- 日本語 net. (n. d.). 文法・例文: ~しかない / ~ほかない. 日本語 NET.
<https://nihongokyoshi-net.com/2018/07/04/jlptn3-grammar-shikanai-hokanai/>
 (検索日: 2024 年 1 月 29 日)
- 西村 はるよ. (2008). 脳血管疾患により障害をもった患者が感じている日常生活の中の困難さ. 日本リハビリテーション看護学会学術大会集録, 20 回, 79-81.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2009067783>
- 西田 有里, 日高 艶子, 小浜 さつき. (2012). 脳卒中患者がたどる心理. 日本リハビリテーション看護学会学術大会集録, 24 回, 116-118.
<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2013058691>
- 新田 静江. (2003). 脳血管障害による歩行障害のある成人・高齢者の身体的・心理社会的適応と家族介護者の介護負担感と満足感の関係. 看護研究. 36(1), 41-52.
- 荏澤 忠雄. (1990). 脳卒中闘病記: ころんでもただは起きない. 光陽社.
- 脳卒中フェスチャンネル. (2023). 一般社団法人脳フェス実行委員会.

<https://noufes.com/> (検索日: 2024 年 1 月 26 日)

岡山 真理, 小嶋 美沙子. (2013). ADL が低下した在宅要介護高齢者の生きがいの変化について: 脳血管疾患を患った高齢者を対象に. 岩手看護学会誌, (1), 25-37.

<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2013333075>

尾島 喜代美, 伊藤 まゆみ, 矢島 正榮. (2019). 脳血管疾患で片麻痺となった後期高齢者の回復期における心理プロセス. 足利大学看護学研究紀要, 7(1), 1-12.

<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2019231319>

Russell, J. A., & Barrett, L. F. (1999). Core affect, prototypical emotional episodes, and other things called emotion: Dissecting the elephant. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76(5), 805-819. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.76.5.805>

末永 由理, 遠藤 淑美, 島田 広美, 井上 聡子, 佐藤 弘美, 酒井 郁子. (2001). 長期在宅脳血管障害患者の回復過程. 川崎市立看護短期大学紀要, 6(1), 37-49.

<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2001277483>

重田 優子, 笹田 哲. (2023). 回復期リハビリテーション病棟退院後の男性脳卒中者が「ありたい自分のイメージ」と折り合いながら社会参加を継続するプロセス. 作業療法, 42(4), 426-434. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/X821080002>

酒井 郁子, 菊池 祥子. (2000). 脳血管障害者の回復過程における共通体験. 川崎市立看護短期大学紀要, 5(1), 25-32. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2001182440>

清水 なつ美. (2021). 家族と同居する高齢者が血液透析を受ける生活に折り合いをつけようとする様相. ヒューマンケア研究学会誌, 12(1), 1-8.

下村 晃子. (2017). 脳卒中後の障害により生活再構築が難しい独居高齢患者の外来での看護支援. 日本運動器看護学会誌 12, 37.

<https://search.jamas.or.jp/link/ui/2017234700>

下村 裕子, 川村 てる子, 林 裕子, 土方 ふじ子, 大池 美也子, 患者教育研究会.

(2003). 看護が捉える「生活者」の視点-対象者理解と行動変容の「かぎ」. 看護研究. 36(3), 25-37.

瀬戸口 ひとみ, 糸嶺 一郎, 朝倉 千比呂, 鈴木 英子. (2017). 統合失調症との「折り合い」概念分析. 日本保険福祉学会誌, 23(2), 35-45.

関 啓子. (2013). 「話せない」と言えるまで: 言語聴覚士を襲った高次脳機能障害. 医学書院.

- 鈴木 大介. (2016). 脳が壊れた. 新潮社.
- 高橋 恵子, 菱沼 典子, 萱間 真美. (2012). 生活者として壮年期・中年期にある女性が入院治療を余儀なくされた際に抱く気かりと対処プロセス. 日本看護科学学会学術集会講演集, 32 回, 229. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2013102211>
- 高松 和弘, 嶋朋子, 下江 豊, 太田 泰正, 栗山 勝. (2015). 第 1 部 急性期の実態. 小林祥泰(編), 脳卒中データーバンク (pp. 26-27). 中山書店.
- 武田 みどり, (1997). 在宅における脳血管障害者の生活意欲に影響する要因:5 事例へのインタビューを通して. 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, (22), 403-408. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/1998059991>
- 田積 徹. (2015, August 24). 快・不快. 脳科学辞典.
<https://bsd.neuroinf.jp/wiki/%E5%BF%AB%E3%83%BB%E4%B8%8D%E5%BF%AB> (検索日: 2023 年 1 月 20 日)
- 登喜 和江, 高田 早苗. (2006). 壮年期脳卒中患者の障害引き受けに向けての歩み. 日本看護学会誌, 15(2), 2-14. <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2007211416>
- 内田 史江, 谷垣 静子. (2016). がん患者の折り合いの概念分析. 日本在宅ケア学会誌, 20(1), 80-87, <https://search.jamas.or.jp/link/ui/2017116431>
- 山本 博繁. (編). (1984). この苦しみは私たちだけでよい: 脳卒中闘病記集. あすなろ社. 結城俊也. (2007). 千葉中央メディカルセンター. ある脳卒中者の日記分析-身体・障害に焦点を当てて. 臨床心理学研究, 45(1), 10-23.
<https://go.exlibris.link/3rtq1jQ9>
- 結城 俊哉. (2007). ある脳卒中者の日記分析-身体・障害に焦点を当てて-. 臨床心理学研究, 45(1). 10-23. <https://go.exlibris.link/3rtq1jQ9>